

「戦後60年を平和につなぐ」



第二次世界大戦・アジア太平洋戦争が終結して60年の今年。

いま私たちは「平和」の中にいるのでしょうか？

「戦争」「平和」とはいったいなんなのでしょうか？

戦争を体験されたおふたりに、その体験と平和へのメッセージをおききました。

被害の痛みとともに加害の痛みを抱き続けて

戦争が終わった時、私は16歳でした。「神の国の日本には神風が吹いて絶対に勝つ」と信じてましたから、負けたと知った時は本当にショックでした。学徒動員で、女学校3年生からは1日も学校へ行ってません。火薬に紙を巻いたり弾丸に火薬を詰めたりと、爆弾をつくる作業に従事

していました。12時間労働の2交替で、夜勤は夜7時から朝7時まで。睡眠時間が短くてつらかったです。工場の環境は最悪で、火薬の粉が舞い上がり、くしゃみと鼻水が止まりませんでした。薬負けのような症状が出て、顔が腫れあがったこともあります。それでも休めません。「おまえたちの代わりは

後で近くにあった松島遊郭の人たちのものだったと知りました。すすけた顔の女の人が放心状態で黒焦げのバケツを持ってユラユラと歩いて来るのに出会いました。

60年経った今も「昨日のこと」のように

空襲が始まれば、人を助ける余裕はありません。倒れている人に「ごめんね」と思いながら、またいで必死で逃げました。「退避！退避！」と叫ぶ警防団の人に焼夷弾が直撃したのを見ました。肩から刺さって体を突き抜けていました。焼夷弾は1平方メートルに3発以上が落ちるようセットしてあるんですよ。だからバラバラといっぱい落ちてくるんです。そのなかをみんな必死で逃げ惑いました。足に障害をもった子どもと母親が、共同の防空壕に逃げ込んだ時のこと。「足の悪いもんはお国の役に立てへんから入れるな！」という声の中から聞こえました。その子のお母さんは、その後箱車に子どもを乗せて逃げていました。

私も偉そうなことは言えません。倒れている人に声もかけず、自分のことだけで必死だったんです。そのことが今、人前で空襲体験を語る原動力になっています。あれだけの死体のなか、自分だけが生き残ってしまったという罪悪感がどうしても消えません。60年経っても「昨日のこと」です。せめて虫けらのように死んでいったあの人たちの最期を伝えたいんです。

戦争が終わって学校に戻っても、授業はしてもらえませんでした。「戦時特別措置で繰り上げ卒業したのだから」という理由でした。2年後、知人のすすめで就職するまで茫然と暮らしていました。大好きな歴史の先生になるのが夢だったので、勉強できなかったことが口惜しいです。でもある時、ふと気がつきました。「私の作った爆弾で誰かが死んだり傷ついているのではないか、私の目の前で死んでいった人たちのように」とそう思うと、たまらなくつらくなります。私は被害者だけど、加害者でもあるんです。戦争は勝ち負けに関係なく、どちらの国にも悲しい思いをする人をつくる。そのことを若い人たちに知ってほしいと思います。



くぼ みよこ
久保 三也子さん
大阪大空襲の体験を語る会

いくらでもいる。しかしこの工場の器材は天皇陛下から賜ったかけがえのないものだから絶対に粗末に扱ってはいかん」と言われていました。昼休みに教科書を読んでいて見つかり、「今をなんだと心得ておる！」と殴られたことがあります。当時は今の小学生以上の「学生の授業を全面禁止にする」という閣議決定が出ていました。勉強したら非国民だったんですよ。

1945年3月13日の大阪大空襲の翌日、幸いにして自宅が燃えなかった私は、当時動員されていた大正区の工場へ出かけました。自宅周辺が無事だったので、それほどひどいとは思わなかったのです。「絶対に休むな」ときつく言われていたので、行くことしか考えていませんでした。その往復の間に見た光景は今も忘れられません。どこまで行っても焼けている。橋の上で人が重なって倒れているし、川にもたくさんの死体が流れていました。木津川にはきれいな着物が何枚も流れていたのが印象に残っていたのですが、

戦争の歴史を顧み、非戦・平和の誓いを

戦時下の「皇国少年」

私は1934年、4歳のときに母に連れられて朝鮮から大阪に来ました。一足先に出稼ぎ労働に来ていた父を追ってきたのです。それは、植民地的労働移民の家庭づくりでした。よって私は、移民の子として在日を始め、もう70年余りを経たことになります。

小学校に入ったのは日中戦争が始まった年、太平洋戦争が起こったのは小学校5年のとき、終戦は旧制中学校3年のときでした。しかも日中戦争が始まって間もなく、在日朝鮮人を統制する官製団体の「協和会」ができ、同会によって「尽忠報国」の精神に徹した「皇国臣民」（子どもには「皇国少年」）化を強いられました。ちなみに日本の子どもに強いられたのは、「軍国少年」たることでした。そして学校では、軍国主義教育が行なわれ、私は「皇国少年」として、その教育を真剣に受けたのです。

いわば、小学校の高学年の体育や課外の少年団活動では、竹槍訓練、手旗信号の訓練などがありました。中学校では、学科よりも軍事教練が重視され、匍匐訓練、銃剣術、夜間行軍などの戦いの訓練、究極は「敵を殺す」訓練を受けたことになります。中学校3年になると、学徒勤労動員令によって授業はなくなり、軍需工場に動員されて軍用工具の製造にあたりました。同工場が米空軍の焼夷弾投下で焼失すると、航空機の燃料を採る松根掘りに動員されました。しかも米軍機の焼夷弾、爆弾投下によって焼け果てた街とか、壊滅的に破壊された軍需工場、戦災死者の露天茶屋、戦災者の移動などの目撃、また何度も空襲に遭遇し、防空壕の中で死の不安を感じながら、動員の現場に通ったものです。顧みますと目撃した戦争の惨禍は筆舌では言いつくせませんし、「皇国少年」としての戦争体験からは、苦しかったことしか浮かんできません。

「最も良い戦争よりも、最も悪い平和を」

終戦60年目を迎えます。さきの戦争を起こした指導者は、「天に代わって不義を撃つ」と、「正義」の戦いを唱えました。そして、「鬼畜米英」といい、米英の指導者も「黄色い猿」といって、たがいに敵国の人を獣人視させて、銃を向け合わせました。「ひと」を「ひと」とみない、「正義」は嘘の正義です。

戦後私は、朝鮮学校の教師を20年ほどしました。そのなかで、朝鮮戦争（1950～53年）が起こった日に際し、「朝鮮戦争は同族相食む悲惨な戦争でした。わたしたちの時代には、二度と、こんな戦争を起こさないようにしましょう。昔、ローマの哲学者キケロは言いました。『最も良い戦争よりも、最も悪い平和を』」と、生徒新聞に書き、朝鮮人団体（北系）から、こっ酷くやられたことがあります。私は、「皇国少年」体験と戦後に学んだ民主主義に抛り、「正義」の戦争というのは指導者の言い分であって、それには非戦・平和の固い決意で対抗すべきだと考えています。たとえ対抗の結果が「悪い平和」であったとしても、人類の歴史には人間の自由と平和を奪う、悪い指導者の治世が何百年も続いた試しはありません。

緊張感のある共生関係を

戦後60年を経て、いま在日の世代は3世～4世になりました。私のような戦争を知る世代は、在日60万人余りのうち、もう5%を切ります。その戦前からの世代は、植民地期の民族差別に加え、戦後の制度的差別に対抗的でした。しかし、今の日本社会は在日への理解、差別が一定に改善されましたし、在日の側



ヤン ヨンフ
梁永厚さん

関西大学講師

も日本生れで母語・第一言語が日本語の「日本語人」が中心世代となり、共生社会の構築をめざすようになりました。共生には、嘘や誤魔化しのない真実と緊張が求められます。

これからの日本を、どんな国にするかはマジョリティである日本国民にかかっています。植民地的被支配の歴史を背景にもつマイノリティの「日本語人」が、差別を感じずに暮らせる社会を拓き、世界の人びとから、さすがと讃えられる国づくりをしてくれることを望みます。

戦争がつけた傷あとは深く、今も癒えることはありません。戦争によって家族を失った悲しみ、空襲を生き延びた人の苦しみ、侵略によって人生を左右された人の苦労ははかりしれません。また、今も地中に残る爆弾が大阪府内で発見されたり、中国に旧日本軍が廃棄した化学兵器の処理がいまだに進んでおらず、腐食が心配されたりしています（日本政府推計70万発、中国政府推計200万発）。戦後の課題はまだあり、終わったとはいえません。

戦争は最大の人権侵害であり、二度と起こしてはなりません。戦争とは何か、戦争の被害と加害の現実を見つめていくこと、平和は“誰か”ではなく“自分”がつくりだすもの。戦後60年を平和につなぐことが、私たちに問われているのではないのでしょうか。